

土岐頼康と斯波義将 ―尾張・三河からみた室町幕府―

松島周一

はじめに

土岐頼康は文保二年（一二三二）に生まれ、嘉慶元年（一二三九）に没した。^{〔1〕} 数えて七十歳の齡を保ったのは、当時としては長命である。叔父にあたる土岐頼遠が康永元年（一三四二）に光厳上皇の行列に乱暴をはたらいたとして処刑されたあと、土岐氏を嗣いで美濃守護となった。以後、開創期の室町幕府を軍事的に支えて活動し、尾張・伊勢の守護も兼ね、土岐氏の最盛期を現出させた。

斯波義将は観応元年（一二五〇）に生まれ、応永十七年（一四一〇）に没した。^{〔2〕} 名前の読みはヨシユキであるという。父の高経は足利一門の有力者として、やはり開創期の室町幕府を支える一方で、足利尊氏や義詮など室町殿との対立も繰り返した。義将は康安二年（一三六二）に父の後見の下、十三歳で義詮の執事となり、貞治五年（一二六六）までつとめたが、父の失脚によってその座を追われた。の

ちに復権し、康暦元年（一三七九）から明德二年（一三九二）、さらに明德四年から応永五年（一三九八）にかけても管領をつとめている。斯波氏は高経が失脚した時など一時期を除けば、越前など北国の守護となっていた。応永七年（一四〇〇）頃には義将の子の義重が尾張守護となっていて、それ以降、越前・尾張、それに遠江などが斯波氏の守護としての領国として知られている。

このように概観するだけでも、この両者が室町幕府の中で枢要な地位を占めた有力者であることは、容易に看取できるであろう。さらに、この両者は愛知県域とも関係が深い。土岐頼康は本人が、斯波義将は子の義重が尾張守護となつてゐる（実質的には義将が支配下に置いていたのである）。また、斯波氏の重要な所領（地頭職を持つ庄園）として三河の碧海庄があり、また被官が山中郷の代官をつとめている（四章以降を参照）。そのため、愛知県域に関わる史料には、両者の足跡を窺うことのできるものが含ま

ように留意していきたい。

一、土岐頼康と半済令

れている。それらの史料に載せられた尾張や三河での出来事を通して、彼らが室町幕府とどのように向き合っていたかを検討するための素材を見出すことができるのではなからうか。中央においては幕府の重鎮であった彼らが、一方で地域での活動の中では、その幕府とどのような距離感をつくりだしていたのか。それを検証していくことは、当時の室町幕府のありようを考える上でも意義を有するのではなからうか。

筆者はこれまでに幾度か、この二人の足跡のうちのごく一部分だけであるが、言及する機会を持つことができた。その過程で、彼らの動向からは、一個の有力守護の事例を見出すだけに止まらず、室町幕府という武家政権のありようについて検討するための手がかりを探ることができののではないかと考えるようになった。もちろん、筆者には重すぎる課題であるが、これまで積みあげてきた作業から、僅かずつでも考察の糸口をつかめないかと思う。

以上のような問題関心から、小稿では尾張・三河での頼康と義将の足跡の一部を取り上げ、それが幕府との間でどのような関係性を形づくることになっていったのかを辿っていきたい。そのため、事実関係については、これまでに筆者が述べてきたことを繰り返す場合もある。その点についてはなるべく簡潔を旨とし、全体的な展望につなげられる

室町幕府の初代將軍（幕府のトップが常に征夷大將軍であつたわけではなく、必ずしも將軍との呼称が相応しいわけではないが、以下ではあくまで便宜的に、その呼称を使つていく）である足利尊氏と弟の直義が対立し、幕府の分裂、抗争が起つたあと、苦境に陥つた尊氏とその後継者となる義詮を支えて、頼康がどれほど貢献しつづけたのかについては、筆者もこれまで触れてきている。以下はその繰り返しとなる部分であり、行論に必要な限りで最低限のことだけ押さえていくこととする。

室町幕府では、貞和五年（一三四九）以降、観応の擾乱とよばれる紛争がつづいた。足利尊氏の弟であり実質的な幕府の政務のトップである直義と、尊氏の執事で幕府の軍事的活動の中心であつた高師直の対立、抗争である。観応二年（一三五二）二月には師直など高一族が多数殺害され、直義が幕府の事実上の中心となつた。しかし、直義も七月末には失脚し、京都から逃れて尊氏との戦いをつづけることになる。やがて北陸道沿いに鎌倉へと逃れた直義を追つて、尊氏も十一月に東海道を東へと下つていく。途中、足

利氏の拠点である三河において、有力な足利一門でありながらも直義派に属する吉良氏の抗戦に直面した尊氏は、京都と鎌倉を結ぶ要地である三河とその中心の矢作(岡崎市)の確保に不安を抱き、隣国尾張の守護になったばかりの土岐頼康に援軍を求めた。その時の書状には、以下のような尊氏の懇願が記されている。

【史料一】

又ハつ(幡頭)へせい(勢)をつかハして、せいなきなんと申さる、事、あるましく候、まつこの事をいそかれ候へく候、……

さらのしやう(吉良庄)のけうと(凶徒↓吉良満義・満貞父子)、いかにもここ(矢作)をす(捨)て、とを(通り候ハ、い(出)て候て、みち(道)なんとをうちふさく事候ぬへく候、京都へ中てう(条)のひせん(備前↓秀長)をめ(召)し候つる、それかつ(着)き候はんまで、きやうたい(兄弟)の中に一人まいらせられ候て、三川国にむかへちん(陣)をとりておかれ候へく候、……

十一月廿日

(足利義氏)
(花押)

右馬権頭(土岐頼康)殿

高橋庄(豊田市)の有力者である中条秀長に三河を任せ

【一】の中は松島の注記。以下同】

たい尊氏であったが、秀長は京都でも幕府を支える立場であり、簡単には戻れそうにない。そこで尊氏は、美濃の守護として実力を蓄え、隣国尾張の守護を兼任したばかりの頼康に助けを求めたのである。ところが、尊氏も認めているように、当時の頼康は新たな管国である尾張で、知多半島の敵対勢力と交戦の真っ直中であつた。南朝の勢力圏である大和南部は伊勢と背中合わせの地であり、伊勢湾を経由すれば知多半島は目前である。そのため知多半島、特に先端部の羽豆岬にはやくから南朝の拠点が築かれていたのであり、頼康の軍事力は、まずそちらとの戦いに投入されていた。しかし、窮地の尊氏は、そうした土岐頼康にさるなる負担を求めるしかなかったのである。

しかし、頼康に求められた軍事的負担はそれだけではなかった。年が明けた観応三年閏二月、京都で尊氏の留守を守っていた足利義詮(のちの二代将軍)は南朝勢に敗北し、京都から近江に逃れた。その義詮を救援するために駆けつけたのが頼康であり、彼が率いる東海地域の軍勢であつた。この助けをうけて、義詮は三月には京都を回復し、五月に漸く南朝勢を敗走させた。このように、観応二年から三年にかけて、頼康は東海地域と京都の二方面で、実質的な幕府の主力部隊としての役割を果たさなければならなかったのである。この過重負担がどのような結果を招いたのか。

観応三年四月はじめ、京都の貴族は日記にこう書き記した。

【史料二】

……又聞、熱田大宮司昌能・蜂屋（貞経）・原等輩并吉良（満義）・石塔（頼房）等一揆与みの守護代合戦、以外有力之間、守護代引退、引洲侯橋、念可賜勢之由、此一兩日飛脚到来、就其種々有評定、……⁽⁹⁾

二方面で幕府を支える土岐の軍事力は疲弊し、本国が敵勢の脅威にさらされるまでの状況になっていた。主力部隊が崩壊しかねないというのは、幕府にとっても重大な危機である。おそらくこれが直接の契機となつて、この年七月、尾張・美濃・近江へ半済令が出されたと考えられる。半済令は、守護が庄園などの收穫の半分を兵糧として徴収できるといふものであり、要するに幕府の軍事費確保の手段なのである。これによつて、尾張と美濃を支配する土岐頼康は、配下の軍勢の働きに対して手厚く酬いることのできる財源を手中に収めたことになる。それは、より多くの武士たちを動員してその忠節を期待する、すなわち軍事力を強化することに直結するのである。のちに半済令は対象地域を拡大し、室町幕府にとつてもさまざまな意味を持つ制度に変化していくが、その最初期には、危機に瀕した土岐頼康の軍事力を立て直すための措置であつたと考えてよいであらう。一例として半済令をとりあげたが、このように苦

闘する室町幕府にとつて土岐頼康は重要な存在なのであつた。また頼康もその期待に応えて、以後も幕府軍の中心となつて京都などの最前線で戦いつづけ、また政治的にも尊氏・義詮・義満の足利三代にわたる宿老として、幕府政治の展開に関わりつづけた。成立期の室町幕府を語ろうとする時、頼康は欠くべからざる存在なのである。

二、土岐頼康と大成庄

前章でみたように、土岐頼康が室町幕府を支える重要人物であつたことは確かである。ただ、その頼康が幕府の命令とどのように向き合つていたのかは、もう少し検討しておく必要がある。そのための恰好の事例を、尾張の地は有していると思われる。ここでは東寺領庄園の大成庄⁽¹⁰⁾を取り上げたい。東寺は京都の大本寺として、幕府とも関わりの深い庄園領主であつた。現在の愛西市にあつた大成庄は、その東寺が領家職を持っていたのであるが、この時期、現地ですまざまな押領行為がつづき、東寺の支配力は弱体化していた。その大成庄に関して、貞治二年（一三六三）七月、幕府の管領である斯波義将は次のような管領奉書を出している。將軍である足利義詮の意を受けて、管領が命じるといふ形の文書である。

【史料三】

東寺雜掌賴兼申尾張国大成庄領家職事、申狀如此、
……仍度々施行之處、猿子美濃入道（道宗）濫妨未休
云々、招其咎歟、不日退彼輩、沙汰付雜掌於下地、可
被執進請取、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

貞治二年七月十八日

治部大輔在判

土岐大膳大夫入道殿^①

治部大輔は斯波義將、宛名の土岐大膳大夫入道が賴康である。この時、東寺は大成莊への猿子道宗の濫妨行為を幕府に訴え、それを受けて幕府側の斯波義將が尾張守護である賴康を「何度も命令しているのに、猿子美濃入道（道宗）の濫妨がまったく収まっていないではないか」と難詰しているという文面である。ただし、義將はこの年まだ十四歳であるから、管領といっても実際には父の斯波高経がその職務を後見して取り仕切っていたのであろう。文面だけを見れば、幕府が守護に厳しく命じているかのような体裁であるが、現実はどうであったのか。それは以後の経過が雄弁に語ることになる。

なお、この管領奉書は賴康を宛名にして命令する形のものであるが、実際には訴訟を起こした東寺に給付される。あとは、東寺がそれを賴康のもとに持ち込み、幕府の支持を背景に交渉するのであり、それが当時のシステムである。

この時の経緯は、それを明確に示す事例となる。以下の史料が注目される。

【史料四】

（八月）十日、就大成庄遵行事、光祿（土岐賴康）舍弟宮内少輔（土岐直氏）殿（当国守護代）被進光祿方之狀到来、悦喜無極者也、仍止符案了、

東寺雜掌、寺領奉書持參候、是へ御施行を給候はん事煩にて候へし、……此事雜掌不知案内候之由申候之間、如此申候、急速二可有御披露候、恐々謹言、

八月十日

去（直）氏判

齋藤中務忠（丞カ）殿殿^②

【一】の中は割書。以下同】

『東寺執行日記』からの引用である。東寺側は、尾張守護代である直氏が光祿すなわち土岐賴康に宛てている書状が自分たちのところに「到来」した、と喜んでいる。すなわち、直氏は賴康宛の書状を、それを必要とする東寺に与えて、あとは寺側に対応させているのであって、いわばこれは、賴康への「紹介状」ともいうべきものである。四行目以下がその直氏の書状（の写し）であり、彼はこの内容を賴康に取り次ぐよう、兄の近臣に求めている。そこでは「寺領奉書」を東寺の雜掌が直氏のもとに持参したことが述べられていた。これが史料三の管領奉書である。こ

の奉書は、土岐頼康を宛名にしながらも、実際には東寺が受け取り、土岐側との折衝の手段とするためのものであったことが、如実にうかがえよう。ただ、「雑掌不知案内」というから、東寺側は土岐氏と交渉するためのルートを持つていなかったのである。そこで、まずは守護代の直氏のところに話を持ち込み、頼康への「紹介状」を獲得したという展開がここに示されているのであり、だから東寺は「悦喜無極」と喜んでいたのであった。

こうした経緯のあと、東寺からの申し入れを受けた頼康は、八月二十五日付で、この問題を取り扱う土岐家側の担当者二名に、使節として現地へ赴き、東寺の大成庄領家職を回復させるよう命じている。では、その結果はどのようなものになったのか。

【史料五】

(九月) 十日、慶妙法師、自大成庄上洛、於当庄者、去月廿五日守護(土岐頼康)直施行、今月二日打渡下地畢、而敵方猿子美濃入道々宗代カニ(可兒カ)ノ藤兵衛立帰、遵行之由乱妨之間、……

頼康に命じられた土岐側の使節二名は、九月二日に東寺側の僧慶妙に対して、大成庄の現地で、所領を返還するといふセレモニーは確かに行った。ところが、その使節が立ち去ると、たちまち猿子道宗の配下が舞い戻って、これ

までと同様に東寺側の命令を聞かず、慶妙たちを排除してしまつたのである。そののちも東寺側は、守護頼康の命令を振りかざして道宗に寺領の回復を求めたのであるが、道宗の対応は次のようなものであった。

【史料六】

(十二月) 一日、……慶妙法師自大成庄上洛、但当庄事、……土岐光祿出状之間、直雖付遣猿子(亦○部)美濃入道、拝領替地之後可避之云々、言語道断珍事也、……

割書で書き込まれている「亦○部」の部分は、おそらく本来は「亦号郡戸」と書かれていたと推測される(後出の史料八参照)。この『東寺執行日記』は写本で伝来しており、筆写の過程でこの部分が判読できなかつたのであろう。このように、猿子道宗は美濃入道や郡戸入道といわれる人物であつた。郡戸は岐阜県海津市の地名である。

ここで道宗は東寺側に対して、「拝領替地之後可避之」すなわち「替え地をいただけるのなら、大成庄をお返ししましょう」とうそぶいている。東寺側は言語道断のことだ、と憤激するばかりであつた。翌貞治三年(一三六四)年六月、再び幕府は

【史料七】

東寺雑掌頼憲申尾張国大成庄領家職事、重解状如此、

……先々其沙汰訖、而猿子美濃入道濫妨未休云々、招罪科歟、不日退彼輩、沙汰付下地於雜掌、可被執進請取之状、依仰執達如件、

貞治三年六月廿三日

左近將監判

土岐大膳大夫入道^⑤

との引付方頭人奉書を出している。左近將監は引付方頭人の斯波義高である。東寺からの再度の訴えをうけた幕府は、「何度命じても、猿子道宗の濫妨は相変わらずではないか、何とか対応せよ」と、再び土岐頼康に命じ（る内容の文書を東寺に与え）たのである。文面は厳しいが、つまり前年の幕府の命令は効果をあげなかったということになる。以後の経緯は前年と同じであったが、その中で東寺側と対面した尾張守護代の土岐直氏が次のように述べていることは興味深い。

【史料八】

（七月）廿五日、……為大成庄事、参侍所〔土岐宮内少輔（直氏）、即有対面、但猿子方内書事ハ不可叶云々、縦雖書遣彼仁不可叙用、仍難治云々、次光祿方状事ハ如去年可書進、今兩三日之間、可賜取雜掌云々、……

廿八日、同
宮内少輔殿状案
畏申入候、

抑先日申入候東寺八幡宮御領尾張国大成事、重御教書

をなされ候、郡戸入道（猿子道宗）致違乱之由申候、早々ニ止被違乱候、東寺代官方へ被仰付候、畏入候、……恐々謹言、

貞治三

七月廿八日

直氏状在判

斎藤中務丞殿^⑥

幕府の引付頭人奉書（直氏の書状の中では「重御教書」とされている）を持参して交渉してきた東寺側に対して、尾張守護代である土岐直氏は、道宗への命令を自分が出すことは拒否した。その理由は「縦雖書遣彼仁不可叙用」すなわち「自分が命令しても、道宗はいうことを聞かない」と自認していたからなのである。そのため直氏は、再び尾張守護である兄の頼康へ東寺のために対応を求める書状を書き、これを東寺に与えた。直氏としては、これが自分ができる精一杯のところであるといったところか。

こうした一連の経緯をみていく際、猿子道宗が「美濃入道」や「郡戸入道」といわれていることが重要である。この人物は美濃から尾張に入って、大成庄を實力支配していたものである。すなわち彼は、土岐頼康の配下の一人なのである。守護代である土岐直氏が、どうせ自分の命令などは聞かないだろう、と認めていることも、そう考えれば理解しやすい。猿子道宗が頼康の軍事力を支える美濃の武

士の一人であれば、その統制は頼康にしかできないことであり、尾張守護代であろうとも、勝手な処分は困難なのである。そうした当時の軍事優先の状況は、

【史料九】

(九月) 一日、……自大成庄預所許、狀到来、去月十日慶妙下向事、無相違之由申之、但当庄(大成庄)遵行事、光祿去月十九日発向伊勢国之間、於当国(尾張)難及沙汰、於伊勢国可有其沙汰由返答云々、⁽¹⁾

という東寺側の預所からの報告にも明らかであろう。土岐勢が軍事活動を展開している間は、東寺からの使者が現地に赴いても、守護側の遵行すなわち東寺側の権利回復の動きは進展しないままである、というのが現実なのであった。

おそらく、頼康も立前としては、東寺に道宗との折衝が可能になるような文書を与え、また使節を現地に派遣して東寺の領家としての権利を回復させるようなセレモニーは行なっているものの、本気で配下の権利を奪う意思はなかったであろう。道宗もそれが分かっているからこそ、貞治二年の象徴的な事例では、頼康の使節が立ち去ると、早速東寺の権利を踏みにじったのである。そして、頼康の命令を楯にした東寺からの交渉にも耳を傾けず、所領を回復しなければ替え地をよこせ、と強気な対応をとることがで

きたと思われる。

以上、貞治二年から三年にかけての、尾張国大成庄をめぐる土岐頼康と東寺側の動きを辿ってきた。有力寺院であり庄園領主でもある東寺の権利を保全しようとする室町幕府の命令が、土岐頼康という強大な守護によってどのように扱われていたか、というひとつの典型的な事例を、ここに見出すことができるように思われる。

三、土岐頼康と大成庄(二)

大成庄をめぐる土岐頼康と東寺の遣り取りは、ここで終わったわけではなかった。東寺にとつては貴重な寺領である大成庄の権利回復は変わらずに追求すべき課題なのである。そのための活動は、後年にも繰り返される。

あくまで現存する史料による限りではあるが、東寺の訴えは至徳二年(一三八五)以降にも起こされている。前章の事例から四半世紀のちである。その間、貞治五年(一二六六)八月には、斯波高経・義将父子が失脚して幕府と敵対する立場となったものの、翌貞治六年七月に高経が没すると、やがて義将は赦免されるなどの変転があった。⁽²⁾さらに、康暦元年(一二七九)にはいわゆる康暦の政変が起こり、細川頼之が失脚して、それまで幕府の非主流

派であつた斯波義將が、再び管領に返り咲いた。そうした経緯のあと、再び大成庄をめぐる問題が、史料の上にあらわれてくるのである。こうした幕府政治史の動きが、大成庄に関する東寺の動きにも影響を与えていた可能性はあろうが、現在の筆者の能力ではこれ以上論ずることができない。この点については他日を期したい。

その至徳二年の動きは、次の史料に示されている。

【史料十】

東寺領尾張国大成庄領家職事、寺領号雖無子細候、寺用到来無其實候哉、被渡下地於雜掌、可致所務之由歎申候、無相違候者、喜入候、恐々謹言、

至徳二

六月十三日

義將^{在判}

土岐殿^⑨

東寺の訴えをうけた管領斯波義將は、まず私信の形で、頼康に善処を求めたのである。もちろんそれは、完全な個人としての行動ではなく、幕府の管領たる人物が、しかし幕府の公の問題にせずになるべく事態を穩便に収めたいとの配慮を示しているのだ、というアピールを含んだものであろう。康暦の政変においては、義將と頼康は、管領細川頼之と対立し、これを追い落とす側で協働した、いわば同志であつた。政変後の幕府の運営でも、管領の義將にとつ

ては長老である頼康の協力が欠かせないものであつたろう。その立場が、こうした書状に反映されていたと思われる。

しかし、土岐氏の被官による大成庄への押領行為は止まず、翌至徳三年、再び東寺は幕府に対して「近年守護之家、或号寺家之代官、或称守護之恩給、令押領於下地、不及一粒之済進之間、条々御願欲令退転之条、歎而有余^⑩」と訴えている。これをうけて、さすがに義將は幕府としての対応をとらざるを得なくなつたのであろう、次の管領奉書を頼康宛に作成して東寺に与えている。

【史料十一】

東寺雜掌申尾張国大成庄領家職事、申状・具書如此、被官輩押領云々、早止其妨、可被沙汰付雜掌之状、依仰執達如件、

至徳三年八月廿九日

左衛門佐^{在判}

土岐大膳大夫入道殿^⑪

左衛門佐が斯波義將である。さらに、翌至徳四年五月から八月にかけても、同じことが繰り返された。

【史料十二】

東寺雜掌申尾張国大成庄領家職事、重申状・具書如此、先度被仰之处、不事行云々、不日止被官人妨、沙汰付雜掌、可被執進請取之状、依仰執達如件、

至徳四年五月廿一日

左衛門佐御判

(殿脱力)

土岐大膳大夫入道

八月にもこうした管領奉書が出されており、文面はほぼ同じである。その合間の閏五月には、再び義将から頼康に、書状の形で「御教書雖及度々候、未能御遵行之由、為寺家歎申候之間、重被成御教書候」と、幕府としての命令が無視されつづけていることを強調して、善処を求める要請がなされていた。

ここで問題になっている、押領行為の当事者である土岐家の被官は、すでに四半世紀前の猿子道宗から他の者に替わっていたのかもしれないが、とにかく東寺の領家職が回復できていない状況は同じなのである。

ここで改めて振り返ってみると、前章の貞治二年(一二三三)からの動きでは、頼康に対峙しなければならなかった管領は十四歳の義将であったが、その後見としては足利一門の重鎮である父の斯波高経がいたし、彼らがその意を奉じている将軍は、三十代半ばという壮年の足利義詮なのである。中央政権としての幕府の陣容は、決して脆弱なものではなかった。しかし、そんな幕府からの東寺領保護の命令に対して、頼康は結局のところゼロ回答しか出さなかったのである。確かに、第一章でもみたように、将

軍義詮自身が、十年前の南朝勢との京都攻防戦で頼康に救われた過去を持っていたのであるが。

一方、この至徳三年頃の幕府をみると、第三代将軍の足利義満は、貞治六年(一二三六)の年末に十歳で父の義詮の跡を嗣いでから二十年近くを経て、既に三十歳に近くになっている。管領として義満の意を奉ずる立場の義将自身も三十代後半に入っており、それぞれ政権のトップに立つに相応しい存在となっていたと思われる。しかし、その陣容であっても、頼康には歯が立たなかったということになる。「御教書雖及度々候、未能御遵行之由、為寺家歎申候之間、重被成御教書候」との義将の言葉には、頼康の対応によって、將軍義満の命令が何度も反故にされてしまっている、と幕府の權威の失墜を憂慮するような響きも籠められているのではないか。

土岐頼康は決して室町幕府に敵対的な人物ではなかった。観応の擾乱からつづく幕府の軍事的危機にあたっては、自らの領国が崩壊しかねないまでの過重負担を引き受けて、幕府の危機を回避していったのであるし、幕府側もその働きに酬い、援助するために半済令をはじめて発令するなど、両者の結びつきは深く強かった。だからこそ、頼康は最期まで幕府の重鎮としての立場を失わなかったのである。しかし、その頼康も、自らの配下の武士が獲得した(た

とえ「押領」と非難される形であっても）権益の維持については、幕府の命令を握りつぶし、將軍の權威を失墜させかねない対応を繰り返していたことになる。幕府と、それを支える有力守護との関係は、こうした二面性の上に理解されるべきものではなからうか。

結局、幕府が土岐氏に対して圧力を加え、尾張への支配を掘り崩すことが可能になるのは、嘉慶元年（至徳四年を改元、一三八七）十二月に頼康が七十歳で没したあとのことなのである。土岐氏は惣領の座をめぐって内部対立が激化し、幕府の圧力に曝されることになる。明徳元年（一二三〇）の土岐氏の乱を経て、尾張守護は畠山氏などに交替していく流れがつくられた。⁽²⁵⁾ただ、その頃には東寺の大成庄經營の動きも行き詰まり、寺領としての実質は失われていったようである。このように概観すれば、室町幕府が保護を加えようとした東寺領大成庄を解体させていったのは、巨視的にはその幕府の重鎮であった土岐頼康の姿勢であったという皮肉な展開を捉えることができる。

四、斯波義将と山中郷

前章までの斯波義将は、管領として、土岐頼康という大物を向こうに回し、幕府や將軍の威令を貫徹しようと必死

にもがいている人物、といったイメージで捉えられるかもしれない。それは間違いではない。若年の時には父の高経とともに幕府に敵対したこともあったが、それを赦免されて幕府に復帰してからは、生涯を通して幕府の最重要人物の一人としての存在感を示しつづけた。足利義満の下で二度の管領をつとめ、また義満が逝去して義持が足利家の後継者となると、その下でも子の義重や孫の義淳と並んで管領をつとめた。義満と義持という室町幕府の安定期を現出した二代の將軍の下で、斯波氏を率いて幕府政治を支えつづけたのである。応永十七年（一四一〇）に没すると、「当世武門之重人也」⁽²⁶⁾と評されたが、これは武門すなわち幕府にとつての重要人物であったということであり、その存在の重みが周囲からも認められていたといえよう。

斯波氏は義重が応永七年（一四〇〇）以降に尾張守護となっていたことが確認され、⁽²⁷⁾そのち室町時代を通じて（形式的には永祿四年（一五六一）に織田信長によつて斯波義銀が追放されるまで）⁽²⁸⁾その地位を継承しつづけた。そのため、愛知県域ではまず尾張との関係の深さが目立つ。しかし、その一方で三河とも接点は多いのである。まず斯波氏は、鎌倉時代から室町時代にかけて、碧海庄の地頭であった時期が長い。⁽²⁹⁾碧海庄は矢作川の中流域の、現在では岡崎市、安城市、豊田市にかかる地域に広がる庄園である。そ

して、斯波義将が管領として活動し、大成庄をめぐる土岐頼康に幕府の命令を遵守させようと悪戦苦闘していたのと同じ頃の一三八〇年代、その義将が、同じく三河国内の山中郷と呼ばれる地域を、領主の東寺などと睨み合いながら、自らの支配下に組み込もうとしていたのである⁽³⁰⁾。

中世に山中郷と呼ばれていたのは、三河の中心に位置する額田郡の南東部、宝飯郡に接する辺りで、現在は岡崎市内の舞木・池金・羽栗・山綱町などとなっている地域である。この場所は、鎌倉時代を通して、額田郡地頭である足利氏の支配下にあったと考えられる。額田郡は足利氏にとっての三河国内の重要な拠点として、室町幕府が成立したあとも奉公衆や御料所が散見される地域であった。山中郷も同様であったことは、永和三年（一三七七）に郷内を南方・北方二つに分けてそれぞれに作成された名寄帳から推定することができる⁽³¹⁾。これは郷内の徴税単位である名⁽³²⁾ごとに、租税をどれだけ、どのような形で徴収するのかをまとめたものである。その作成にあたったのが「彦部四郎左衛門尉」とされており、これは彦部忠春に比定できるとされる。彦部氏は足利氏の重臣であった高氏の一族であり、室町幕府の奉公衆でもあった。その人物が管轄していた山中郷は、幕府の御料所であった可能性が高い。

山中郷周辺は東西交通のための道筋にあたる要衝であり、そのために人や物資の動きが盛んであった。もともと古代の律令国家においても、三河の「山綱」には駅馬が置かれていたが、これはのちの山中郷に含まれる場所であろう。中世になると、たとえば永享四年（一四三二）に室町幕府六代將軍である足利義教が富士遊覧へと出向いた時の記録に、移動の途中で休憩所を設けた山中宿が「にぎは、しさもかぎりなし」すなわち「大変に賑わっている」と書き残されている⁽³³⁾。古代から中世を通して、山中の地が三河国内でも重視されるべき土地であることは変わらなかったといえよう。

なお、義将が山中郷に支配の手を伸ばそうとしたのは、単に一地域の領有という問題だけのことでなく、当時の幕府内の政治動向と関わったことであつた可能性がある。この時期、斯波義将は越前の守護であり、弟の義種が信濃の守護であつた（間もなく義将が信濃守護となり、義種は加賀の守護をつとめる⁽³⁴⁾）。尾張や遠江が斯波氏の守護領国となるのは十五世紀に入ってからであるから、まだのちのことである。従って一三八〇年代といえば、東海道筋では三河の碧海庄こそが斯波氏の主要な拠点なのであつた。義将としては、これに交通の要衝である山中郷を加えることで、三河への支配力を強化する思惑があつたのでは

なからうか。矢作に隣接した碧海庄と、その矢作につながる東西交通の要衝である山中郷を押さえれば、斯波氏の三河全体への影響力は相当に強固なものになり得る。では、斯波氏が三河を押さえれば、どのような政治的效果が生じたであろうか。前記のように、当時の斯波氏は義将・義種の兄弟で越前や信濃を掌中に収めていた。その上に三河を押さえれば、東海・東山・北陸の大国がその領国となり、京都と東日本の間に巨大な壁を作り、その両方に睨みを利かすことができる。京都と鎌倉という東西二つの中心を持つ室町幕府体制においては、その政治的軍事的な立場も一層堅固に構築されるであろう。

室町幕府内での政争では、これまでもその一端を述べてきたように、斯波氏も義将自身も浮沈を重ねている。それだけに、幕府内での権勢をより磐石なものにしようとする志向を義将が持つことは、むしろ自然である。そのための鍵が、一三八〇年代にあつては三河であつた。折しもその三河では、二十年近くにわたって守護をつとめていた大島（新田）義高にかわり、足利一門の一角範光が康暦元年（一二七九）頃から守護として登場してきたばかりである。⁽³⁸⁾ 範光は康暦の政変において、義将と敵対する細川頼之派の一員であつたと思われる。⁽³⁹⁾ 義将が、範光の勢力を削ぎ、自らの勢威を高めるための三河奪取を構想していたとみるこ

とは、かなり蓋然性の高い仮説となるであろう。⁽⁴⁰⁾

ただ、問題はその過程において、義将が（自らが管領をつとめている）幕府と、どのような形で接点を持ったのかということである。以下、その流れを簡単に辿ってみる。

五、斯波義将と山中郷（二）

幕府の御料所として、奉公衆である彦部氏が管轄していたはずの山中郷を、斯波義将はどのようにして支配下に置くことが可能になったのか。その経緯については筆者なりの見方を既に述べたことがある。⁽⁴¹⁾ ここでは、それを小稿の論旨に必要な限りで、要約していくこととする。

康暦二年（一三八〇）、山中郷は東寺の西院造営料所として幕府から寄進された。⁽⁴²⁾ この造営は長期にわたってつづく、かなり大規模な工事であつた。当時の幕府の管領は、前年の康暦の政変で細川頼之を追い落としたばかりの斯波義将であつた。すなわち義将の下で、幕府の御料所が東寺の造営料所とされたのである。さらに彼は、当初は彦部忠春が御料所時から継続していた山中郷の代官の職務、すなわち年貢を徴収して東寺へ納入する（その際に、代官も一定の得金を獲得することになる）役割を、やがて嶋田兼将という者に交替させる。至徳二年（一三八五）のことで

ある。⁽⁴³⁾ 嶋田氏は斯波氏の所領である碧海庄の地頭代官をつとめる斯波氏の被官であり、兼将もその一族であろう。斯波義将は自らの配下を山中郷の現地に赴かせ、東寺の造営料の徴収に当たらせようとしたのである。東寺への協力姿勢を示すとともに、自分の被官にも権益を与えようとしたものであろう。

ただ、こうした義将のやり方には、東寺も彦部忠春も反発したようである。忠春については、義将の下で山中郷代官となつてゐる嶋田兼将が、明徳元年（一三九〇）に東寺に送つた書状の中で、「彦部殿方より内々指招候て、逃散しさせたる事にて候」⁽⁴⁵⁾と非難してゐることが注目される。兼将が代官としてきちんと年貢を徴収し、東寺に送ることが困難なのは、彦部忠春がかつての代官としての人脈を使つてであらう、郷内の百姓たちを脱走させて生産力を減退させてゐるためだ、という言い分なのである。このように前代官の彦部氏は山中郷を奪つた斯波氏側に対して敵対的な姿勢を示してゐたのであるが、さらにその動向は東寺とも連繋する形をとつてゐた。いわば奉公衆の彦部氏と、京都の大寺である東寺が手を結び、斯波義将との間に緊張關係を持つことになつたわけである。その様相を最も象徴的に示すと思われるのが、次の義将の書状である。

【史料十三】

山中事者、当年計ハちん（珍カ）なるさま、如元にてありたく候、碧海庄等事も□（可カ）為煩候、其段松田ニも申付候、只今彦部来候て申候之間、此分を申付候、可有御心得候也、とくと請申分をハ、たとひ百姓等無沙汰候とも、弥二郎（嶋田兼将）可沙汰候上者、為寺家不可有子細候歟、於後年者可加了見也、先此分を彦部ニも可被仰候、恐々謹言、

〔至徳二〕

十月廿八日

義将（花押）

増長院殿⁽⁴⁶⁾

義将が、自らの意思を直接に東寺に伝えた書状である。この年、山中郷では洪水による被害が生じ、それを受けて嶋田兼将が東寺との間で年貢の減免についての交渉を行なつてゐた。いわばそこに介入する形で、義将が乗り出してゐたのである。この文面を解釈する上で重要になるのは、「其段松田ニも申付候」の部分であらう。松田は室町幕府の奉行人の苗字としてよく知られてゐる。すなわち將軍足利義満の意向を奉じて活動する奉行人が、この問題に関わつてゐるのである。この時期、幕府奉行人として活動してゐた松田氏といえ、永徳二年（一三八二）に東寺領丹波国大山庄での、また同三年や至徳三年（一三八六）

に同じく播磨国矢野庄での、即位段銭の免除を守護や守護使に命じている松田貞秀などが候補になろう。

他にも詰めておくべき点がある。東寺の造営料所としての山中郷と嶋田兼将の関係を主題とする書状に、なぜ東寺と関係のない碧海庄の話が唐突に出てくるのか。前記のように、碧海庄は斯波氏が地頭職を帯び、実質的な所領とされている場所であるが、それがなぜ、ここでの話柄に関わってくるのであろうか。筆者はそれを、当時の水害は山中郷だけにとどまらず、周辺の地域にも関わる問題であったためと考えることで、整合的に理解できると考えた。山中郷の近辺で水害を引き起こす河川といえは、乙川の支流がもつとも可能性が高い。そこで年貢徴収に影響するほどの水害が発生していたとすれば、乙川や、その本流である矢作川の流域が無事であったとは考えられない。庄内を矢作川が流れる碧海庄でも、被害が発生していたとみるのが妥当である。それゆえ碧海庄の地頭である斯波義将は、東寺の不満を抑えて、苦しいのはお前たちだけではない、三河全体がそうであり、私も被害を受けている当事者なのだ、だからお前たちだけが被害者のように振る舞うな、と釘を刺しているのである。

以上の点も踏まえて、この史料を筆者は次のように試読している。

「山中郷の年貢が水害などのために今年は（代官の嶋田兼将から）きちんと納められていない（当年計ハ珍なる様）」のは残念である。もちろん通常のように全額が納入されることが望ましいし、いずれはそのように山中郷を復興したいと思う（如元にてありたく候）。（しかし、今年に限っていえば三河の各地が被害を受けており）私の所領である碧海庄でも年貢の減少が避けられない状況だ（碧海庄等事も可為煩候）。奉行人の松田貞秀が（兼将の年貢納入に不満を抱くあなたがた東寺関係者の訴えをお聞きになった將軍義満さまの意を受けて、兼将の主人である私に）善処を求めてきたが、（そうした三河全体の状況を述べて）山中郷の東寺だけが苦しいのではないと返答しておいた（ので、あなたがたも松田の動きに期待してもムダだ）。すると今度は、彦部忠春が乗り込んで（て、嶋田兼将では東寺が不満を抱いていると訴えてき）たので、こちらにも同様に答えて追い返した。東寺のあなたがたも、こうした今年の三河の特殊事情をしっかりと認識し、私がこのような対応をしていることを了解してもらいたい（可有御心得候也）。（私の被官である嶋田兼将の対応に不満があるようだが）一度納入を約束した年貢については、たとえ山中郷の百姓が払えないと言おうとも、兼将は必ず納入してみせる男だ。だから、あなたがたも兼将の排斥を考えたり

しないでもらいたい（「為寺家不可有子細候歟」）。三河の状況が落ち着いて、きちんと年貢を集められるようになれば、埋め合わせをしていくこともできよう（於後年者可加了見也）。（あなたがたは彦部忠春と手を結んで、兼将を排斥しようとしているようだが）この私の言い分を忠春にも告げて（もう無駄な策謀はあきらめて）もらいたい（「先此分を彦部ニも可被仰候」）。

少し長くなったが、意識も加え、全体の意味が一貫して通じるようにしてみたつもりである。ここで斯波義将が東寺に対して「此分を彦部ニも可被仰候」と告げているのは、ある意味では痛烈な皮肉であろう。お前たちが同類であることは分かっているのだ、という示威がここには籠もっている。まさに東寺と彦部忠春の連繋による嶋田兼将排斥の動きが表面化していたのである。前記のように、忠春はこのあと山中郷から百姓たちを逃亡させようとしたと非難されている。あくまで推測であるが、そうした忠春の動きは、山中郷の現地が洪水の被害に悩まされている状況を背景にして、この至徳二年の頃から起こっていたのではなかろうか。労働力を欠乏させることで兼将による年貢の確保をさらに困難にし、東寺が兼将を忌避する正当性を作りだそうとしたのであろう。こうした展開を踏まえながら、東寺は、造営料所である山中郷の年貢が納入されないことを幕府に

訴える。ただ、兼将の主人は管領であるから、彼らはその上の將軍足利義満のところまで訴えを持ち込もうとしたのではなかろうか。東寺は京都の大庄園領主として、忠春は奉公衆として、それぞれ義満に働きかけるための回路は有していたであろう。そのため、幕府奉行人の松田貞秀が義将との折衝に当たることになったのである。書状の文面を読む限り、義将はこうした状況を理解していたと思われる。しかし、こうした包囲網が布かれ、將軍義満が乗り出しても、義将は一步も譲らずに山中郷代官としての兼将を守り抜いた。東寺に対しては、むしろ示威的な姿勢さえ示して、その訴えを退けたのである。

このように、義将は幕府の内外から反発を受けながらも、山中郷を自らの支配下に置きつづけた。いわば、この時の山中郷に対する義将の支配は、正当な権利として幕府から認められたものというよりも、義将の幕府内における権勢と他者との力関係によって実現していた所領化なのであり、嶋田兼将がこの地の代官であり得たのは、義将による政治的任用としてなのである。そのため、幕府の首脳部が交替すると、その波動が直ちに山中郷にも及ぶことになった。明徳二年（一三九一）三月、幕府では管領が義将から細川頼元に交替する。十二年前の康暦の政変では、頼元の兄であり養父である細川頼之が、斯波義将や土岐頼康に

よつて政權の座から追放された。今回の政変はその揺り戻しであり、かつての細川頼之派が幕府中枢に返り咲いたことになる。その半年後、頼元主導の幕府は、山中郷を伊勢貞行に管轄させて貞行が東寺に年貢を納入することとし、同時に造営工事の終了とともに山中郷を御料所に戻して、東寺の權益を停止する方向性を打ち出した。実態としては、斯波義将から山中郷の權益を奪い、將軍側近の伊勢氏に与えたのである。そして伊勢氏による御料所山中郷の知行は、

おそらく忠仁・文明の乱の段階でその実態が失われるまでつづいたのではなからうか。山中郷は重要な御料所であるがゆえに、幕府中枢の権力争いやそれに連動する寺院対策などからの影響を直接に受けていたのである。この地をめぐる動きは、単なる一地方の動向にとどまらず、当時の幕府内の権力構造を垣間見ることのできる事象であつたといえよう。

以上が、一三八〇年代に山中郷をめぐるつてあらわれた、斯波義将の足跡の必要最小限な範囲での紹介である。改めて想起すれば、そもそも御料所である山中郷を、東寺の造営事業のために寄進したのは、義将が管領である幕府であつた。その意味では、義将は東寺に対して冷淡でも敵対的でもなかつた。むしろ、東寺の造営料所への寄進を停止する流れを作つていった彼の反対派よりも、東寺への保護

の姿勢を有していたともいえよう。

そうした義将の姿勢は、既にみてきたように、同時期の尾張国大成庄の事例からも窺える。ここでは、東寺の庄園領主としての權益を確保するために、義将はかなり努力を重ねていた。しかしその義将が、ほぼ同時期に、山中郷の問題では、今度は東寺の前に立ちはだかる巨大な壁となつていたのである。ただし、その際に義将が追求していたのは、自分の被官である嶋田兼将が山中郷の代官となることであり、それに反する行動を東寺がとつた場合においてのみ、敵対的な姿勢を示したということに注意が必要であらう。たとえば、前掲の史料十三においても、義将は山中郷から東寺への年貢納入自体を拒否しているのではなく、たまたま今年は水害のために困難なのだ、と述べているのである。それゆえ、「於後年者可加了見也」すなわち事態が落ち着いてくれば、来年以降にその埋め合わせはする、と明言することにもなつた。換言すれば、義将は幕府の管領としては東寺の造営事業に協力する姿勢を示していたのであるが、斯波氏の当主としては自家の勢力を拡大させ、被官に權益を与えることにも固執しつづけたということである。

こうした展開の中で、小稿の論旨から特に注目したいのは、おそらく東寺や奉公衆からの提訴をうけた將軍義満が

乗り出し、その結果として幕府奉行人が仲介に入っても、幕府の管領としては彼らと同じ政策目的を追求しなければならぬはずの義将は、自家の權益を追求するために、それを拒絶したということである。⁽³⁰⁾ 義将が管領として幕府と將軍の權威を守り強化しようとしていたことは、土岐頼康との対峙の過程でも窺うことができた。その義将自身が、自家の利益のためにはそれと正反對の、ちょうど頼康と相等しい行動をとって憚らなかったのである。義将という同一の人格の中で、一見すると矛盾するような幕府への対応の姿勢が並存していたことを、以上の経緯から読み取ることができるであろう。

むすび

ここまでの作業は、十四世紀の南北朝時代における、土岐頼康と尾張国大成庄ならびに斯波義将と三河国山中郷という、室町幕府の有力者と有力庄園領主である東寺の所領との關係を示す二つの事例を取り上げて、その特徴を探ってきたものである。特に、この問題で幕府が庄園領主（どちらの場合にも東寺であるが）の權益を保護するための（その反面としては、頼康や義将にとって不利となるような）方策をとろうとした（特に大成庄の場合には、それを斯波

義将自身が行なっていたのである）際、他の局面ではその幕府を守って政治的軍事的に貢献してきた彼らが、どのような対応をみせていたのか、という点に注目して展開を整理してきた。そこから判断する限り、最大公約数として幕府を支持・構成する立場は保ちつつも、自家の利益追求はそれによって妨げられないという点では、土岐頼康も斯波義将も共通していたといえようか。彼らはどちらも幕府との關係において二つの顔を持ち、それらは状況によって便宜的に使い分けられていたのである。

繰り返しになるが、彼らは当該期の幕府の最高首脳部を形成する有力者であり、他者が幕府に敵対もしくは反抗すること許さなかった。幕府の命令に従おうとしない者たちを抑え込むために、政治的軍事的なさまざまな対応を彼らはとっていたのである。しかし、自家の利益に関わることでは、幕府の一員としてその命令に従うという姿勢は一転して留保されることになる。とはいえ、それで彼らが幕府内での立場を失うことはない。大成庄の事例に顕著であるが、幕府からの指示が受け入れられるかどうかは、結局のところ、その指示を出す幕府側の人間と、受け取る側の当事者との間の力關係によってくる。管領である斯波義将がどれほど齒嚙みしても、幕府の長老であり、自らの政権の重要な支柱である土岐頼康に譲歩を強いることはできな

かったのである。そして重要なのは、それによって幕府の政治運営が破綻することもなく（もちろん庄園領主である東寺は不利益を被ることになるが）、ゆるやかなまとまり、一体性は保ちつづけられる点であろう。

あえて極端な言い方をすれば、この時期、室町幕府という政権のありようは、少なくとも一面で、体系的に組み立てられた機構や制度とは異なる、こうした有力者たちの力関係に基づくゆるやかな（彼らが引き起こす問題を解決せずに放置することも含めての）集団という要素を持っていたといえよう。尾張や三河の事例に目を向けることで、その上に乗っている中央政治のこうした構造を、下から鮮明に照らし出すことが可能になるのである。

おそらく、このような視角は室町幕府の政治史を取り扱う場合には、多かれ少なかれ意識されることになるものなのではなかろうか。小稿では、それを尾張・三河という現在の愛知県域での事例から具体的に検証してみようと試みた。筆者自身が愛知県史の編纂事業に加わったことで、それまで理解することのできなかったこうした地域の具体例に目が開かれ、それらを調べ叙述することを通して、上部構造である室町幕府の政治史の一端を照らし出すための材料を得ることができるのではないかと考えたためである。もちろん、このようなごく僅かの事例から、室町幕府とい

う巨大な歴史的存在の全体像を云々することはできない。ここで述べたことは、あくまで現地での事例から窺いみることのできる、ある一面（しかも幕府自体がまだ形成途上であり、必ずしも安定した状態になっていない段階での）についてのケーススタディにすぎない。充実した県史の資料編・通史編の刊行をうけながら、乏しい内容を提示することしか出来なかったが、愛知県という豊かな歴史を持つ地域から日本史を見つめ直していく、そのための僅かな一歩でも刻してみようとするのが筆者の目的であった。それがどれだけ果たされているかは、読者諸賢の批判に俟ちたいと思う。

【注】

- (1) 『尊卑分脈』（『新訂増補国史大系』本）第三篇 一五三―四頁（以下、『尊卑』三一―一五三頁のように略記する）。『愛知県史 資料編九 中世二』（愛知県、二〇〇五年）五一―五号史料（以下、『県史』九―五一五のように略記する）として収載。

- (2) 『懺法記』（『県史』九―九五九）、『武衛系図』（『県史』九―九六二）など。

- (3) 『師守記』貞治四年（一三三六）四月二十三日条で、義将の甥の詮将にアキユキと振仮名をしていること

などによる。

- (4) 『大徳寺文書』の中に、斯波義重が応永七年六月二十一日付で尾張国内の所領を大徳寺の塔頭に安堵している文書（『県史』九一七八二）があり、この時点までに義重が守護としての職権を果たすようになっていたことが窺える。
- (5) 拙稿「観応の擾乱と東海地域」（『年報中世史研究』三八、二〇一三年）、「三河国山中郷と室町幕府」（『愛知県史研究』一二二、二〇一八年）など。また、『愛知県史 通史編二 中世一』（愛知県、二〇一八年。以下、『通史』と略記する）第三章第二節「南北朝の動乱と尾張・三河」や第四章第五節「三河の荘園」などの筆者担当分でも、その概要を記述している。
- (6) 前掲拙稿「観応の擾乱と東海地域」など。
- (7) （観応二年）十一月二十日付「足利尊氏御内書」（『愛知県史 資料編八 中世一』（愛知県、二〇〇一年）一三二九号史料。以下『県史』八一―一三二九のように略記する）。
- (8) 当該期の中条秀長については、拙稿「南北朝期の中条氏について」（『豊田市史研究』六、二〇一五年）など参照。
- (9) 『園太暦』観応三年四月五日条（『県史』八一―
- (10) 大成庄についてはさまざまな研究があるが、近年では『通史』第四章第四節「尾張の荘園」（青山幹哉氏・村岡幹生氏など執筆）で、その概要がまとめられている。
- (11) 『東寺執行日記』貞治二年七月廿五日条（『県史』九一二〇）。
- (12) 同・貞治二年八月十日条（『県史』九一二二）。
- (13) 同・貞治二年九月十日条（『県史』九一三〇）。
- (14) 同・貞治二年十二月一日条（『県史』九一三四）。
- (15) 「引付方頭人斯波義高奉書案」（『県史』九一二一（四））。
- (16) 『東寺執行日記』貞治三年七月廿五日・廿八日条（『県史』九一五四）。
- (17) 同・貞治三年九月一日条（『県史』九一五七）。
- (18) 『福井県史 通史編二 中世』（福井県、一九九四年）第二章第二節「守護支配の進展」（河村昭一氏執筆）など。
- (19) 「斯波義将書状案」（『県史』九一四六九）。
- (20) 「東寺雑掌頼勝申状草案」（『県史』九一四八八）。
- (21) 「管領斯波義将奉書案」（『県史』九一二一（五））。
- (22) 「管領斯波義将奉書案」（『県史』九一五〇二（二））。

- (23) 「管領斯波義將奉書案」(『県史』九一二一(七))。
- (24) 「斯波義將書状案」(『県史』九一五〇三)。
- (25) 『通史』第三章第三節「尾張の守護と国人」(水野智之氏執筆) など参照。
- (26) 「懺法講部類」(『県史』九一九六〇)。
- (27) 注四参照。
- (28) 『清須合戦記』(愛知県史 資料編十一 織豊一) (愛知県、二〇〇三年) 一八〇号史料) など。
- (29) 碧海庄と斯波氏の関係については『通史』第四章第五節「三河の荘園」(松島執筆) などでも概観した。
- (30) 前掲拙稿「三河国山中郷と室町幕府」など参照。
- (31) この時期の山中郷については、『新編岡崎市史 中世 二』(岡崎市、一九八九年)第二章第一節第四項「東寺領山中郷」(小林吉光氏執筆) など参照。
- (32) 同・第二章第二節第二項「奉公衆と御料所」(新行紀一氏執筆) など。
- (33) 「三河国山中郷南方公田等名寄帳案」(『県史』九一三〇七)、「三河国山中郷北方公田等名寄帳案」(『県史』九一三〇八)。
- (34) 前掲『新編岡崎市史 中世 二』第二章の「東寺領山中郷」「奉公衆と御料所」参照。
- (35) 『延喜式』卷二十八「駅伝条」(愛知県史 資料編六 古代二)(愛知県、一九九九年)八七九号史料)。
- (36) 『寛富士記』(『県史』九一四一九)。
- (37) 佐藤進一氏「室町幕府守護制度の研究 上」(東京大学出版会、一九六七年)の越前・信濃・加賀の項。
- (38) 『後愚昧記』康暦元年(一三七九)閏四月廿一日条(『県史』九一三四六)。ここで一色範光を「若狭守護并三川守護」と記していることが、一色氏の三川守護としての、史料上の初見である。
- (39) 同前。
- (40) 一色範光は嘉慶二年(一三八八)一月に没しており(『県史』九一五二〇・五二一)、義将が三河に手を伸ばす好機であったかもしれないが、直前の嘉慶元年十二月、反頼之派として義将の政権奪取を支えた有力者である土岐頼康も亡くなっており(『県史』九一五四)、義将としても、この時期には幕府内に波風をたてるような動きは取れなかったのかもしれない。
- (41) 前掲拙稿「三河国山中郷と室町幕府」。
- (42) 「管領斯波義將奉書」(『県史』九一三六二)。
- (43) 前掲拙稿「三河国山中郷と室町幕府」など参照。
- (44) 「南禅寺上乘院雑訴状案」(『県史』九一六七六)に、碧海庄に関して「地頭代官嶋田三河守」とみえる。碧海庄地頭は斯波氏であるから、嶋田氏はその代官を

つとめる被官であった。

(45) 「嶋田兼将書状」(『県史』九一五八五)。

(46) 「斯波義将書状」(『県史』九一四七五)。

(47) 今谷明・高橋康夫氏編『室町幕府文書集成 奉行人奉書篇 上』(思文閣出版、一九八六年) 所収四〇・四一・四五号史料。

(48) 「管領細川頼元奉書」(『県史』九一六一〇)。

(49) たとえば寛正六年(一四六五)八月、幕府は伊豆の堀越公方のもとへ使者を派遣するにあたり、山中郷での警護などを伊勢氏に命じ、伊勢氏の家司である蜷川親元が、山中郷代官である蜷川親賢にそれを伝えている(『蜷川親元日記』八月十日条。『県史』九一二二〇四)。

(50) 義満と義将の関係は、たとえば榎原雅治氏が「斯波義将を首班とした幕府運営」が「義満とはおおむね良好な関係の中で推移した」と評された(同氏「一揆の時代」(同氏編『日本の時代史 十一 一揆の時代』所収、吉川弘文館、二〇〇三年)のように捉えるのが総体としては妥当であろう。ここで取りあげているのは、あくまでその中でもこのような側面がある、と考えるための、個別な特殊事例である

(51) たとえば近年の通史では、山田邦明氏『中世日本の

歴史5 室町の平和』(吉川弘文館、二〇〇九年)などにそうした視角が濃厚に反映されているように、筆者には読みとれた。